The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第1回人文治療(学)国際会議参加報告
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学. 2010, 11, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第１回人文治療（学）国際会議参加報告

中岡成文

報告の主要点は以下のとおりである。

１．臨床哲学のコンセプトとの関連（人文治療・哲学治療）
２．従来の哲学プラクティス（カウンセリング）との関連
３．大学おこし・学科おこしの手法として（組織面）
４．社会連携の手法として
５．（大会運営などに見る）国際性・国際連携の点から
６．今後のコラボレーションの可能性

時系列的叙述を中心とし、その中で以上の６点に適宜光を当てる形で報告する。

事の起こり

韓国の江原道･春川（Chuncheon）市にある江原（Kangwon）大学で開催された「第１回人文治療 (学) 国際会議」（HT2009=The 1st International Conference on Humanities Therapy）に招待されて参加し、臨床哲学について発表したので、その体験について報告する。臨床哲学の意義とこれまでの展開、さらに今後の展望や協働について、国際的視野で考え直すよい機会を与えられた。

「人文治療 (学)」（Humanities Therapy）なるものについてはまったくの初耳（アメリカやカナダの参加者も聞いたことがないと言っていた）で、国際会議への招待もいわば寝耳に水だった。会議は 2009 年 9 月 18-19 日に開催されたわけだが、オーガナイズの実務責任者である江原大学人文学科人文治療セクションの Young Eui Rhee 准教授から招待のメールが舞い込んだのが同年の 4 月初めだったと記憶する。人文治療ないし「哲学治療」のコンセプトについては後述するが、私の経歴に関係づければ、欧米の「哲学カウンセリング」（Philosophical Practice、哲学的「実践」とも訳せる）をアレンジした

ものと理解できた。哲学カウンセリングの創始者であるドイツのアーヘンバッハ（Gerd Achenbach）、同じくアメリカの実力者であるマリノフ（Lou Marinoff）も参加・発表の予定と聞いたので、喜んで招待を受けることにしたのだが、前者はその後キャンセルしたとのことだった。（この二人とは、1998 年哲学カウンセリングの国際会議がドイツのベルギッシュ・グラートバッハ（ケルン郊外）で開かれ、私がドイツ語で講演したときに初めて会っている。[1]）会議言語は英語、つまり発表と討論を当然英語でやる[2]のだが、ここ２，３年英語を使う機会が増え、多少自信もついてきたので、覚悟を決めることにした。付け加えると、韓国の主催者が私に注目したのは、マリノフの著書『プロザック［抗うつ剤］でなく、プラトンを！――日常の問題に哲学を応用する』（Lou Marinoff, *Plato Not Prozac: Applying Philosophy to Everyday Problems*, Harper Collins, 1999）の巻末補遺に「哲学カウンセラー（実践家）Philosophical Practitioners 一覧表」が載っており、その中に日本人、東洋人として唯一私への言及があるのを見たためと思われる。

「人文治療（学）」との初接触、臨床哲学への関心

9 月 17 日に春川に到着したのだが、その前日の 16 日、江原大学哲学科の教員で京都大学の教育学研究科に留学し、日本思想史を専攻する李基原講師からメールが舞い込んだ。哲学科の主だった教員たちが私と面談したいと考えているが、時間がとれないかという打診だった。OK の返事に対して、さらに次のメールが届いた。一部引用する。「江原大哲学科では専門科目として現在「哲学治療学」の講義を設けて、哲学治療や哲学相談などに関する研究や教育を行っております。また当大学の人文科学研究所でも去年からは「人文治療」という研究テーマを設定して、すでに多くの研究者が研究をしております。ですので、先生との話す機会は貴重な経験になると確信をもっています。江原日報（江原道の代表的な新聞）の方からも先生と対談会を設けたい希望があります。これは韓国でも「臨床哲学」に関する非常に高い関心の表明だとおもいます」。

会議前夜にあたるこの日、夕食を囲み、この「対談会」が実現した。江原日報がホストとなって、春川市内を見下ろす夜景のきれいなイタリア料理店で行われた。前述の李基原講師（以下、李さん）が通訳になってくれた。その他に江原大学哲学科教員として、李光来、金善姫の両氏が参加された。お二人は李光来先生運転の車でホテルまで迎えに来られ、われわれは車中で自己紹介と対面を済ませた。李光来教授（以下、李教授）は学者らしい

雰囲気を漂わせた年配の男性で、フランス哲学、東アジア思想（古代の日本・朝鮮の仏教思想比較などを含む）、現代哲学、美術哲学、医学哲学、人文治療・哲学治療が専門だと紹介された。世代のためか、日本思想を研究しておられるためか、日本語は相当程度理解できる。他方、金善姫先生はたぶん私よりはある程度年下の女性研究者で、私にドイツ留学経験があることを知ると、さっそくドイツ語に切り替えてきた。彼女自身はベルリンに 7 年留学していたのだという。国際会議でもドイツ語をしゃべる韓国人の研究者とは何人か出会った。（それも含めて、英語、ドイツ語、もちろん韓国語、さらに一部のゲスト・スピーカーが用いたフランス語、中国語と、春川滞在中はさまざまな外国語にちゃんぽんでさらされた。）

この晩、江原日報からは二人の記者が来ていて、彼らがインタビューする形で対談会は進んだ。このようにマスメディアとチャンネルをもって大学の動きを一般にアピールしようとするところに、人文治療グループの社会連携の積極性がすでに明かである。臨床哲学から理論・実践を学び取りたいということ以外に、江原日報を通じて、人文治療・哲学治療の発信をすることが、この対談会の大きな目的であったようだ。

前日、李さんからのメールに書かれていた私への主な予定質問事項は、（哲学カウンセリングと）心理療法との関係・応用、日本での哲学治療、生活への応用例、なぜ阪大に臨床哲学ができたのか、臨床哲学ではどのような研究者を育てているのか、その将来的展望はどのようなものか、他方哲学治療の展望についてはどう思うか、などであった。「治療」を「カウンセリング」、しかも 1 対 1 のそれだとみなすならば、臨床哲学は創設および「哲学カウンセリング」との初遭遇以来 11 年余のあいだ、「治療」には手を染めてこなかった。そのことは、2009 年 4 月の応用哲学会で「臨床哲学はいかなる実践か」をテーマとするワークショップを企画するにあたり、私が回顧し、確認し、自問したところであった。「臨床哲学はなぜ「苦しみ」への直接的な対処や支援（広い意味でのセラピー）の方向に踏み出さなかったのか」という自問である。

江原大学は、それに対して、「人文治療」（英語ではヒューマニティーズ・セラピーと表現される）あるいは「哲学治療」という理念を掲げてそれを実践している。韓国語（ハングル）を私は習得していないが、「治療」に当たる言葉は漢字で標記する場合は「治療」と書かれ、発音も「ちりょう」にごく近いと思われる。そのプロジェクトの中心は李教授であることが窺われた。

もう一度、人文治療・哲学治療との対比で臨床哲学の特徴を整理すると、臨床哲学は間

接的介入を重要視するといえるのではないか。それは、（1）ケアする人をケアするという意味でも、また（2）ケアされる人の内面で起こること（治癒？）を待ち望む（聴き、待つ）という意味でも。治療ないしケアのかかわりにおける能動性と受動性との兼ね合いはたいへん重要かつデリケートな問題で、この会議のあいだもしばしば問題になった。たとえばマリノフは、カウンセラーはいわばクライアントのうちにあったものをクライアントに「想起」させるのだという趣旨のことを言った。「日記セラピー」を提唱するアダムズ（Kathleen Adams）の発表を聞いていると、彼女の役割はクライアントの自己変容あるいはリフレーミングをサポートすることにあると言えるように思った。

哲学治療（人文治療）プロジェクトの経緯や理念

李教授の話から、人文治療・哲学治療の経緯や理念を私はおおむね以下のように理解した。通訳（李さん）を通じての理解なので、事実関係も含めて、不正確・不十分な点が混じることは諒とされたい。哲学治療（学）は去年から始まった。別の大学で医学系の研究者が同じく哲学治療というコンセプトを出してきたが、自分の提案が国（？）に採択されて、研究プロジェクトが始まった。このコンセプトでセンターを立ち上げたいと思っていて、とくに若い人たちがやる気になっている。

哲学治療は、哲学を社会に生かすことを宗としている。刑務所に行ったり、軍人の相談に応じたりすることを構想している。人間には理性と感性の両面があるが、感性から理性に及ぼしていくことが大切である。私は「感性共感時代」を作りたい。たとえば、病院でも、哲学者が医療者と協力して、感性に感動を与えることができる。特定の香りや音楽が有効である。このあたりは、心理学でいう「ラポール」の概念に近いともいえるが、微妙に違う。

人文学はいま危機に直面している。それは人々の感動・共感に寄与しようとしなかったからである。理論と現場が離れていた。中岡先生はいま、「知識基盤社会で、知識の生産－流通－消費というサイクルに全体的にかかわることが重要である」と述べたが、それに賛成で、哲学はマーケティングにかかわり、人々に消費させるようにしなければならない。共感できて、「買いたい」気持ちを起こさせる――それが哲学治療である。そうすると、人々をより身近に感じることができる。

モデルとして実践しているのは、刑務所に行って人を更正させることである（これは李教授自身の活動で、後述の金先生の出所者向けのプロジェクトとは別らしい）。これは全国に広がる可能性がある。ただ、具体的方法論はこれから作らなければならない。うちの

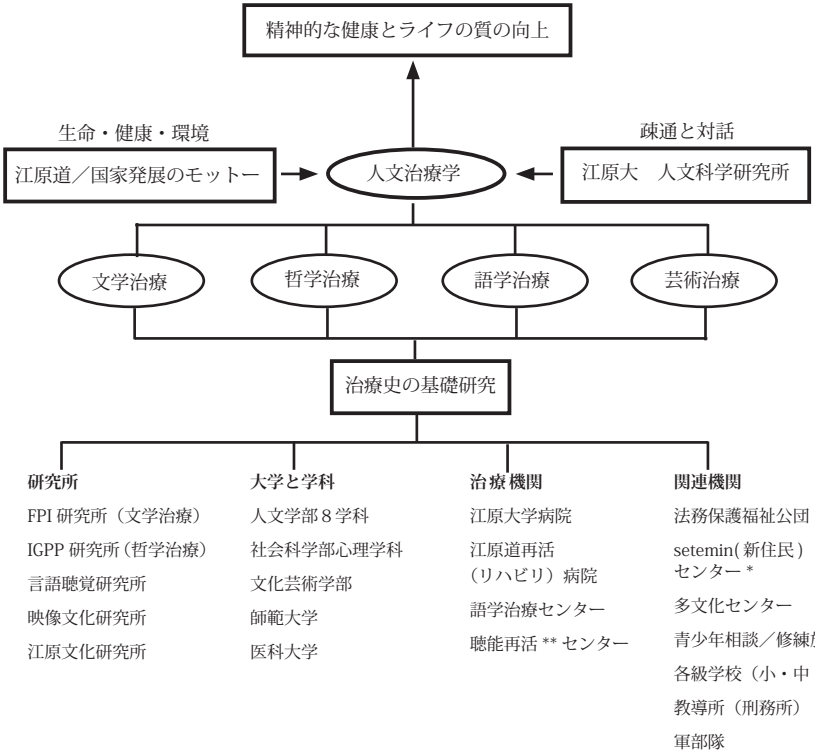
研究所には、「文学治療」や「歴史治療」もあるが……（といって、やや困惑した風。とくに「歴史治療」についてはそれが何でありうるのか、やや懐疑的な議論がこのあと李教授、金先生、李さんの間に交わされたようだ）

私としては、「知識の生産－流通－消費というサイクルに全体的にかかわる」べきことを述べたあと、消費主義には要注意であると付け加えたかったのだが、話の流れでそれに至らなかった。それ以外に、臨床哲学は「問題解決」に一定の距離をおく面がある（したがって、「治療」に対しても同様）とも伝えたかったのだが、これは一言述べただけでは理解されないような気がしたので、控えた。付け加えると、李教授の院生の多くは社会人だそうで、この点でも臨床哲学と似た状況にある。

人文治療の組織面

江原大学における「人文治療」セクションの全貌については、韓国語のパンフレットをもらったので、そこにあった図を邦訳して掲げておく（Kim Hyung Su さんの助けを借りた）。

人文治療（学）は研究目的のプロジェクトで 10 年間お金が下りることになっている（これはたとえば大阪大学のコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）が「教育改革」の名目で 11 年間予算がついたのと似たような感じか）こと、一昨年の 11 月に認可され、ほぼ 2 年経ったこと、などを聞いた。仕掛け人である（らしい）李先生によれば、別の大学でも医学系の研究者が哲学治療学に関心をもち、プロジェクトを申請したが、自分たちのほうが採用されたとのこと。李先生は、哲学を社会に生かすという基本姿勢を強調していた。人文治療・哲学治療のプロジェクトと江原大学人文学部の組織との関係についてはよく理解できなかった。たぶんコアとなる関係教員（人文治療・哲学治療の専門研究者）と協力講座教員とがいるのだろう。新しいセンター構想があるとも聞いた。はっきりしているのは、10 年経ったあとでも、一部コア教員は大学に残って仕事を続けられるということである（CSCD も同じ）。



* 脱北者向け。

** 「再活」は生まれながらの障害に対するリハビリ、「自活」は後天的な要因（事故など）による障害に対するリハビリ（と社会復帰への試み）を意味するようである。

人文治療の社会連携活動

9 月 18 日（金）が国際会議の 1 日目である。

金善姫先生（以下、金先生）と昼食をとりながら、さまざまな意見交換・情報交換をすることができた。先ほどの組織面については、「HT（人文治療）プロジェクトは 10 年間、国からお金をもらうことになっているが、それは準備としてである。そして 10 年たった後も、教授は 3 人ほど（？）残るだろう」と彼女は言っていた。活動面では、刑務所を出た人（出所者）のサポート事業を江原道とタイアップして推進しているそうである。彼

らのリーダーを作るためのトレーニングコースに力を入れているようだった。この活動の中心は、金先生で、江原道の従事者を集めた会議を近々やらなければならず、忙しいと語っていた。

ちなみに、刑務所関連の着眼は韓国グループのオリジナルとは必ずしも言えない。先年亡くなったあるアメリカの女性の哲学カウンセラーは刑務所を訪問する仕事に力を入れていて、私と会ったとき大阪でもやったらと勧めていたし、ドイツの SD（ソクラティクダイアローグ）実践家にも刑務所で SD をやっている人がいる。少年院でワークショップをしているベルギーのアントン（Richard Anthon）もこの流れに属すのだろう。より身近なところでは、臨床哲学出身の武田朋士さんも少年院に勤務していて、ワークショップなどの対話をそこでの教育に持ち込み、カフェフィロとコラボしている。

ここで金先生たちの活動をもう一度整理していえば、国（ないし道）と契約を結んで、

（1）上述の刑務所を出た人のためのセンター

（2）将来的には、北朝鮮から来る人のケアをするセンター

を計画しているということである。これ以外にも、軍隊（韓国は徴兵制）でのカウンセリング活動も計画されており、この種のニードは韓国のような政治社会体制をもつ国では大きいようだ。

自治体や企業などと連携してやる事業では、評価の問題が重要になる。この点について聞くと、量的評価の重要性は否定しないし、将来的には付随的にやってもいいと思う。けれども、より重要なのは、このトレーニングを経験した出所者が変化し、本人がそれを認識しているということだと力説していて、このあたりは臨床哲学の感じ方と近いと思われた。

シンポジウムから

ゲストスピーカーの発表から、興味を引いたいくつかのトピックを紹介する。

初日は、マリノフの基調講演と討論で実質的な幕を開けた。彼はクライアントと「対話」することの重要性を強調した。日本で、あるいは臨床哲学で対話といっても、とくに関心を呼び起こさないだろうが、カウンセラーとして自信満々のスキルを競う欧米人実践家がこれをいうのは格別の意義があると感じた。マリノフによれば、相談内容にふさわしい哲学的テクストをカウンセラーが指示するまえに、クライアントはすでに自分の哲学者を（潜在的にせよ）もっている。カウンセラーはただ、それを identify させてあげるだけだ、と

いう。もっとも、彼の経験からいえば、20 人に一人くらいのクライアントは哲学カウンセリングに適性がないそうだ。

このように謙虚な面も見せつつ、やはり哲学カウンセリングを（私の言葉で言えば）実定的に正当化・提唱・宣伝する姿勢もマリノフは色濃く保っている。古典的な哲学的テクストをなぜ使うのか、なぜそれらが有効なのか、なぜ他の分野のテクストではいけないのかは（時間のせいももちろんあるだろう）、説明されなかった。スウェーデンの病院に招かれ、多発性硬化症の患者に哲学カウンセリングを施したときは、ストア派の哲学者エピクテトスを使って、身体の状態がどうであれ人は「心の平安」をもてるということを理解させたそうだ。彼はまたアリストテレスもよく使い、アリストテレスの定義する幸福は「不壊」だというのだが、はたしてそのとおりであるのか、カウンセリングによってひとまず安寧を得た人もまた不安定に陥ることはないのかと疑問が湧いた。

私の発表でも触れた社会的引きこもりに彼も注目しているらしく、話の中でわずかに言及した。それは、「心理学者が何もできない」例としてである。たしかにそのような傾向はあるのかもしれないが、それでは哲学者や哲学カウンセラーには何ができるのだろうか。ちなみに彼は、「いじめ」が引きこもりの原因だと信じているようだった。日本の状況に関連していえば、日本では哲学カウンセリングや SD よりも哲学カフェが広まる傾向にある。それがなぜだと思うか、できれば彼の意見を聞いてみたかったのだが、時間がなかった。というのも、カウンセリングに来る人（来談者、クライアント）は自分で選んで（self-elected というらしい）来るわけである。そのようなニードをもつ人をカウンセラーはサポートする。それに対して、哲学カフェに来る人、語ることを好む人は、はたして「助け」られるべきであるのか。もし彼らが特別なニードを自ら感じていないとすれば、マリノフのような哲学カウンセラーは彼らにかかわることができるのか、どうなのか。これが私の疑問であった。

アメリカのアダムズは、冒頭に韓国語で比較的長めのあいさつしていた。彼女の教え子が韓国にもいるらしいので、そのような人から教わったのだろう。アダムズはアメリカで、「日記セラピー・センター」（The Center for Journal Therapy）を開設している。彼女の話（質問への答え？）で印象に残っているのは、次のエピソードである。「もう何ヶ月もカウンセリングを受けているのに、ぜんぜん改善（回復）していない」と落胆しているクライアントがいたが、私は彼女が改善（回復）していると感じていた。そこで、「日記を書き始めた最初のときと、１，２ヶ月たったころの日記と比べてから、来週いらっしゃい」とい

うと、翌週にこにこしながら入ってきた。「あなたのいうことがわかりました。私は依然として同じ問題を抱えてはいるけれども、書き方が前とは違ってきているんですね」と。これはつまり、リフレーミングに成功したということかなと私は解釈した。また、自分のセラピーはいわば「自己セラピー」self-therapy であり、その点で自分はカウンセラーよりもむしろ「教師」でありたいと答えていたことも、胸に残った。

会議言語の「多様」さ

発表者の中で唯一の韓国人、江原大学の Min-Yong Lee は「セラピーとしての Storytelling」について発表したが、彼はドイツ文学の研究者で、発表もドイツ語で作成されていた。英語はあまり得意ではないようで、日程の最後のラウンドテーブル(総合討論、マリノフが司会)のとき、英語での発言にすぐ詰まって立ち往生してしまった。逆に言えば、そのように本来「英語使い」でない研究者も英語中心の国際会議にチャレンジしているわけで、この積極姿勢は見習うべきである。もっとも、――ここでついでに会議使用言語のことに触れておくと――会議主催者（オーガナイザー）の意図とたぶん裏腹に、ゲストの中には、ドイツ語を使った上述の Lee 以外に、フランス語を使った発表者が 3 人いたし、中国語を使った発表者も 1 人いた。私は、ドイツ語は問題なく、フランス語はある程度理解できたが、中国語は皆目わからず（ご存知の通り簡体字では、いくら表意言語とはいえ、日本人にはあまり見当がつかない)、ディスプレイに映し出される韓国語ももちろん役に立たないので、中国語の発表のときはまったくお手上げだった。欧米からの参加者もきっとそうだっただろう。その点では、会議言語が十分統一されないための相互理解の不足について、主催者の善処を求めたくなった。

では、フロアの韓国人たちはどうだったか。上述したように、英語は別として、ヨーロッパに留学経験のある研究者はドイツ語なり、フランス語なりで話しかけてくる。ただ、どうも英語があまり得意ではない（少なくとも話せない）聴衆がかなりいるように感じられた。初日夜のレセプションのとき、多くの同僚が英語でしゃべれないのでフラストレーションを感じていると、誰かが言っていた。以前からの漠然とした印象で、韓国の人は全体として英語ができる、少なくとも日本人よりは相当うまいと思っていたので、これはやや意外だった。しかし、いやしくもしゃべれる人はどんどん質問してくる。これはやはり日本人とは違うところと感じた。

私は、「治療的活動における聴く、待つ、動く」(Listen, Wait, and Move in Therapeutic

Activities）と題して、臨床哲学の経験を踏まえた発表を、２日目の午前中にした。冒頭にその日覚えたての言い回しを使い、「私は中岡です」と韓国語で挨拶すると、どっと笑い声が起き、拍手が湧いた。「聴く」ことと「待つ」ことは言うまでもなく鷲田さんのコンセプト、それに対して「動く」ことは田中俊英さん（臨床哲学の博士前期課程修了者、不登校や引きこもりのカウンセラー）の一種対抗的なコンセプトである。半分は臨床哲学の宣伝のつもりで話した。幸いかなりの好評を博したのだと思う。最後のラウンドテーブルのとき、発表者に対するフロアの質問は半分以上私に向けられていたし、それも攻撃的とか、懐疑的なタイプではなく、純粋に興味をもって、もっと細かく聞きたいという質問だった。「聴く」「待つ」と「動く」が一見矛盾した態度であるように見えるが、じつは「弁証法的」に補完し合っているという趣旨も、かなり理解してもらえたようだった。

コラボレーションの可能性

江原大学の関係者は、人文治療の国際会議を今後も２年に１度くらいの割合で続けて開催したいと言っていた。今回の会議には、東アジアでいうと、中国本土だけではなく、台湾からも何人かの参加者があった。日本を含めて、それらの国々で交代に会議を開催できないかと考えているらしい。次回はもう一度江原で開くので、その次は大阪でやってもらえないかという、具体的な申し入れも受けたが、これについては財政的裏付けがない以上、明確な返事をするわけにはもちろんいかなかった。

国際会議はとりあえず別としても、私たちが韓国の人文治療・哲学治療グループから学ぶものは少なくないと思われる。臨床哲学を大阪で孤立的にやってきたつもりでいた者としてびっくりしたのは、韓国には前から臨床哲学はありますよ、だから違和感はないです、と言われたことである。それも単に「書を捨てて街に出る」という広い志向の点で共通するだけではなく、「臨床哲学」というそのものずばりの名称を掲げて、もう何十年も前から哲学的活動を展開している人がいるというのである。半信半疑だったが、その人物、金榮振教授とシンポジウム会場で会い、「臨床哲学」について意見交換することもできた。金教授は、オックスフォード大学への留学経験があり、かのストローソンやエヤーと机を並べて勉強したと言っていた。

それ以外にも、大学人として学びたいことは、彼らが李教授を中心として、このコンセプトで資金を獲得し、学内に研究所（？）を設立し、そこに多様な教員・研究者を結集できていることである（自治体からの委託を受けるなど社会連携を積極的に推進している

ことは言うまでもない)。哲学治療のコアになるスタッフ（李教授、金先生など）以外に、広く人文学に関係する同僚（文学、歴史学などの専門）が彼らに協力して「人文治療」を展開している。上述のように、たとえば歴史学という学問をどう「治療」に結びつけるのかという疑問は生じるし、関係者によって「治療」への取り組みに温度差はあるだろうと推測もできるのだが、とまれ学内的にも学外的にも求心力のあるコンセプトを掲げて活躍できていることはすばらしい。阪大でも、広義での「哲学治療」（仮）に哲学科教員を巻き込み、それと狭義の臨床哲学とを分ける形で文学研究科の将来を考えられないものか――これはたんにふと胸をかすめた思いにすぎない。

注

1　哲学カウンセリング（プラクティス）の運動と臨床哲学との交流については、『臨床哲学』創刊号、1999 年に私が「哲学プラクティス（カウンセリング）国際学会に参加して」を寄稿して以来、『臨床哲学のメチエ』などにもいくつかの報告がある。

2　実際にはそうならなかった。後述参照。